

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Commentaries on the zhongguo xiaoshuo shilüe  
(lu-xun's a brief history of Chinese fiction) (X V  
contd.)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2000-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中嶋, 長文, Nakajima, Osafumi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1440">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1440</a>

This work is licensed under a Creative Commons  
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0  
International License.



# 中國小說史略考證 第十五

中 島 長 文

## 第十五篇 元明傳來之講史（下）

<sup>1</sup>「水滸」故事、以至蓋如是而已。

一三九十一

寫印本「大略」十一「元明傳來之歷史演義」云、宋人講史不限于全史、其數較一時或一人故事者、亦隸此種。故吳自牧夢梁錄講史條下云、「有王六大夫、於咸淳年間敷演復華篇及中興名將傳、聽者紛紛」。其類之至今猶存者爲水滸傳。

水滸傳爲南宋初年以來相傳之故事、宋江亦實有其人、見於宋史。徽宗宣和三年「淮南盜宋江等犯淮陽軍、遣將討捕、又犯京東、江北、入楚海州界、命知州張叔夜投降之。」（卷二十二）至於降後之事、則史無明文、而稗史謂其討方臘有功、封節度使、然擒臘者實韓世忠、與江等無與、惟宋史侯蒙傳有云、「宋江寇京東、蒙上書言宋江以三十六人橫行齊魏、官軍數萬、無敢抗者。其才必過人、今青溪盜起、不若赦江、使討方臘以自贖。」（卷三百五十一）然當時雖有此議而實未行、小說家則因以附會。洪邁夷堅乙志云、「宣和七年、戶部侍郎蔡居厚罷、知青州、以病不赴歸金陵、疽發于

背卒、」未幾其所親王生亡而復甦、見蔡受冥譴、以告其妻、「夫人慟哭曰、侍郎去年帥鄆時、有梁山濼賊五百人受降、既而悉誅之、吾屢諫不聽也。」乙志成于乾道二年、去宣和不過四十餘年、耳目甚近、冥譴固小說家言、殺降則不容臆造、山濼終局、如此而已。

現行「史略」第十五篇はすでに「考證」第十四篇の冒頭で述べたが、鉛印本「大略」では第十三篇に位置し、「史略」初版から第七版までは第十四篇に於て叙述された。この段は後まで殆んど寫印本の叙述を襲つていて大きな異同はない。但し鉛印本にはこの記述に先立つて、施耐庵と羅貫中に關する言及があり、羅に關する部分は第十四篇3に引かれてゐる。今施に關する部分を左に引用する。

宋之説話人、於小説講史皆多高手（名見「夢梁錄」及「武林舊事」、而不聞有著作、其以講史著稱後世者、蓋莫過於元之施耐菴。耐菴、錢唐人（明高儒「百川書志」六）、著「水滸傳」、有一小説序云、「嘗入市肆袖閱故書、於敵楮中得宋張叔夜禽賊招語一通、備悉其二百八人所由起、因潤飾成此編。」而名及事跡皆不可考（序言見胡應麟「筆叢」四十一、然難信、又云「施某事見田叔禾「西湖志餘」、而寔無有、乃誤記也。）或者實無其人。

文字の異同は鉛印本から現行本まで殆んどない。冒頭「水滸」故事亦……」の二重括弧は三八年版全集で附けられたものでそれまではなかった。又「亦」は訂正版で補われた。（見十三篇）の「十三」は訂正版までは「前」に作り、「蔡居厚罷」、「疽發于背」の句讀點も訂正版以前の版にはなく、それぞれ訂正版で現行のように改められた。初版は「戸部侍郎」の「侍」を「待」に誤る。

「小説的歴史的變遷」第四講云、二、「水滸傳」「水滸傳」是叙宋江等の事情、也自羅貫中起始。因爲宋江是實有其人的、爲盜亦是事實、關於他的事情、從南宋以來就成社會上的傳説。宋元間有高如・李嵩等、即以水滸故事作小説。

宋遺民龔聖與又作「宋江三十六人贊」。又「宣和遺事」上也有講「宋江擒方臘有功、封節度使」等說話、可見這種故事、早已傳播人口、或早有種種簡略的書本、也未可知。到後來、羅貫中薈萃諸說、或小本「水滸」故事、而取捨之、便成了大部的「水滸傳」。但原本之「水滸傳」、現在已不可得、所通行的「水滸傳」有兩類。一類是七十回的、一類是多于七十回的。多于七十回的一類是先叙洪太尉誤走妖魔、而次以百八人漸聚梁山泊、打家劫舍、後來受招安、用以破遼、平田虎・王慶、擒方臘、立了大功。最後朝廷疑忌、宋江服毒而死、終成神明。其中招安之說、乃是宋末到元初的思想、因爲當時社會擾亂、官兵壓制平民、民之和平者忍受之、不和平者便分離而爲盜。盜一面與官兵抗、官兵不勝、一面則擄掠人民、民間自然亦時受其騷擾。但一到外寇進來、官兵又不能抵抗的時候、人民因爲仇視外族、便想用較勝于官兵的盜來抵抗他、所以盜又爲當時所稱道了。至于宋江服毒的一層、乃明初加入的、明太祖統一天下之後、疑忌功臣、橫行殺戮、善終的很不多、人民爲對于被害之功臣表同情起見、就加上宋江服毒成神之事去。——這也就是事實上缺陷者、小說使他團圓的老例。

「魯迅藏書目錄」子部雜記異聞云、「夷堅志」二百另六卷 宋洪邁著 民國十六年（一九二七）上海商務印書館據宋鈔明鈔明刻本鉛印 二十冊

この著録は時期から見て直接に「史略」と關しないから、「史略」が據つたのはおそらく十萬卷樓叢書本だと思われる。拙稿第十一篇7参照。魯迅はこの叢書を初編から三編まで全卷架藏していた。

小説に關する研究は當時の中國では始つたばかりであり、「水滸傳」についても例外ではなかつた。しかし「史略」に先行するものとして胡適の業績があり、「史略」の本篇での叙述も、贊同も否定も含めてそれが前提となつてゐる。交友關係による書物の貸借りや情報の交換のみならず、胡適の研究が大きく影響していることは否定できない事實で

ある。

胡適の「水滸傳」研究には次の諸論がある。

「水滸傳考證」 民國九年亜東圖書館「水滸」(七十回本) 初版

「水滸後考」 民國十年亜東圖書館「水滸」再版 この二論は後「胡適文存」卷三に收録。

「水滸續集兩種序」 民國十三年亜東圖書館「水滸續集」初版 後「胡適文存」二集卷四に收録。

「百二十回本忠義水滸傳序」 民國十八年商務印書館「百二十回的水滸」(萬有文庫) 初版に「水滸傳新考」  
として冠せられ、後「胡適文存」第三集卷五に現行の名で收録。

後年胡適は章回小説に關する研究を繼めて民國三十三年實業印書館から「中國章回小説考證」を出した。以上の  
四論はみなそこに收められている。一九八〇年上海書店がその書を影印刊行した。

なお「水滸傳」の版本については「孫目」の他、馬蹄疾「水滸書録」(一九八六年上海古籍出版社)、高島俊男「水滸  
傳の世界」(一九八七年大修館書店) 參照。

梁章鉅「浪跡叢談」六云、水滸傳之作、亦依傍正史、而事蹟不能相符。宋史徽宗本紀「宣和三年二月、淮南盜宋江等  
犯淮陽軍、又犯京東、江北、入楚、海州界、命知州張叔夜招降之。」侯蒙傳「宋江寇京東、蒙上書言、宋江以三十六  
人橫行齊魏、官軍數萬、無敢抗者、其才必過人。今青溪盜起、不若赦江、使討方臘以自贖。」張叔夜傳「叔夜再知海  
州。宋江起河朔、轉略十郡、官軍莫敢攖其鋒。聲言將至、叔夜使間者覘所向、賊徑趨海濱、劫巨舟十餘載鹵獲。於是  
募死士得千人、設伏近城、而出輕兵距海誘之戰、先匿壯卒海旁、伺兵合、舉火焚其舟、賊聞之、皆無鬪志、伏兵乘之、  
擒其副賊、江乃降。」按侯蒙傳雖有使討方臘之語、事無可考。宋江以二月降、方臘以四月擒、或籍其力。但其時擒臘

者、據徽宗本紀、以爲忠州防禦使辛興宗。據童貫傳、以爲宣撫制使童貫、據韓世忠傳、則世忠以偏將窮追至青溪峒、問野婦得徑、渡險數里、擣其穴、辛興宗掠其俘、以爲己功、皆與宋江無涉也。（下略）〔小說舊聞鈔〕引。

蔣瑞藻「小說考證」一引俞樾「小浮梅閒話」而云、宋江事見張叔夜傳。（引文與前「浪跡叢談」所引同、今從略）宋江降後、無使訪方臘事。方臘事見童貫傳云、（今從略）又韓世忠傳、「方臘反、世忠以偏將從王淵討之。時有詔、能得臘首者、授兩鎮節鉞。世忠窮追、至睦州青溪峒、問野婦得徑、即挺身仗戈直前。度險數里、擣其穴、格殺數十人、擒臘以出。辛興宗領兵截峒口、掠其俘爲己功。」是擒方臘者、韓世忠也。乃生前既爲辛興宗冒功、而數百年後、稗官演說又歸之於武松、折何薪王之不幸也。唯侯蒙傳、（引文與前「浪跡叢談」所引同、今從略）是赦宋江以討方臘、侯蒙有此議、而實未之行、小說家卽本此附會爾。

俞樾「茶香室續鈔」十六云、宋洪邁「夷堅乙志」云、宣和七年、戶部侍郎蔡居厚罷、知青州、以病不赴、歸金陵、疽發於背卒。未幾、所親王生暴亡、三日復蘇、云如夢中有人相追、逮至公庭。俄西邊小門開、獄卒護一囚、紐械聯貫、立庭下。別有二人舁桶血、自頭澆之。囚大叫、痛苦如不堪忍者。細視之、乃侍郎也。復押入小門、回望某云、「汝今歸、便與吾妻說、速營功果救我、今祇是理會鄆州事。」夫人慟哭曰、「侍郎去年帥鄆時、有梁山濠賊五百人受降、旣而悉誅之。屢諫、不聽也。」乃作黃籙醮、爲謝罪乞命。按此梁山濠賊、卽宋江等也。宋江事見「宋史」張叔夜傳、但云擒其副賊、江乃降。至降後爲蔡居厚所殺、而蔡居厚又以殺降獲冥譴、則人所未知也。（後略）〔小說舊聞鈔〕引。

「夷堅乙志」六云、宣和七年、戶部侍郎蔡居厚罷、知青州、以病不赴、歸金陵。疽發于背、命道士設醮、倩所親王生作青詞、少日而蔡卒。未幾、王生暴亡、三日復蘇、連呼曰、「請侍郎夫人來。」夫人至、王乃云、「初如夢中、有人相追逮、拒不肯往、其人就牀見執。回顧、身元在牀臥、自意已死、遂俱行。天色如濃陰大霧中、足常離地三尺許、約十

數里、至公庭。主者問、「何以詭作青詞誑上蒼。」某方知所謂、拱對曰、「皆是蔡侍郎命意、某行文而已。」主者怒稍霽、押令退立。俄西邊小門開、獄卒護一囚、杻械聯貫、立庭下。別有二人舁桶血、自頭澆之。囚大叫、頓掣苦痛、如不堪忍者。細視之、乃侍郎也。主者退。復押入小門、回望某云、「汝今歸、便與吾妻說、速營功果救我、今祇是理會鄆州事。」夫人慟哭曰、「侍郎去年帥鄆時、有梁山濩賊五百人受降、既而悉誅之、吾屢諫、不聽也。今日及此、痛哉。」乃招路時中作黃籙醮、爲謝罪請命。一九八一年中華書局何卓點校本。

「夷堅乙志」序云、「夷堅」初志成、士大夫或傳之、今鑲板于閩、于蜀、于婺、于臨安、蓋家有其書。人以予好奇尚異也、每得一說、或千里寄聲、於是五年間又得卷帙多寡與前編等、乃以乙志名之。凡甲乙二書、合爲六百事、天下之怪怪奇奇盡萃於是矣。夫齊諧之志怪、莊周之談天、虛無幻茫、不可致詰。逮于竇之「搜神」、奇章公之「玄怪」、谷神子之「博異」、「河東」之說、「宣室」之志、「稽神」之錄、皆不能無寓言於其間。若予是書、遠不過一甲子、耳目相接、皆表表有據依者。謂予不信、其往見烏有先生而問之。乾道二年十二月十八日、番陽洪邁景廬敘。同上。宣和六年、西紀一一二四年、乾道二年、西紀一一六六年也。

2 然宋江等嘯聚梁山濩時、以至宋江收方臘有功封節度使

一三一四

寫印本「大略」十一。次の數箇所を除いて現行本と異同はない。「嘯聚」の「嘯」字なし。「(卷三百五十三)」は括弧の後に。「亦云」は「亦言」。「于是」云々は「意者當時必有奇聞故事流傳民間、輾轉繁變、以成巷語」。「好事者」は「文人」。「宣和遺事」云々は「宣和遺事前集中亦有梁山濩始末、遺事乃取他書所爲、則宋江事亦必別有本據、惟不知爲何人所作耳。其目如下」。

鉛印本「大略」から現行本に至るまで、第三版が「宣和遺事」由鈔撮舊籍而成。」と句點にする他は異同がない。

「宋史」三百五十三は本篇に引く「浪跡叢談」に明らかのように「張叔夜傳」の記述。「癸辛雜識」續集上の記事は、「小説舊聞鈔」の朗瑛「七修類稿」二十五に引く「癸辛雜志」（「類稿」は「志」に作る）の証明として次の案語を附して原文全文を引く。「案、周密所錄贊、時爲後人稱道、今揭之于後、以備考覽——」

周密「癸辛雜識」續集上云、龔聖與作宋江三十六贊并序曰、「宋江事見於街談巷語、不足采著、雖有高如李高輩傳寫、士大夫亦不見黜。余年少時壯其人、欲存之畫贊、以未見信書載事實、不敢輕爲。及異時見東都事略中載侍郎侯蒙傳有書一篇、陳制賊之計云、「宋江以三十六人橫行河朔京東、官軍數萬、無敢抗者、其材必有過人、不若赦過招降、使訪方臘、以此自贖、或可平東南之亂。」余然後知江輩真有聞於時者。於是即三十六人、人爲一贊、而箴體在焉。蓋其本撥矣、將使一歸於正、義勇不相戾、此詩人忠厚之心也。余嘗以江之所爲、雖不得自齒、然其識性超卓有過人者、立號既不僭侈、名稱儼然、猶循軌轍、雖託之記載可也。古稱柳盜跖爲盜賊之聖、以其守壹至於極處。能出類而拔萃若江者、其殆庶幾乎。雖然、彼跖與江、與之盜名而不辭、躬履盜迹而無諱者也。豈若世之亂臣賊子、畏影而自走、所爲近在一身、而其禍未嘗不流四海。嗚呼、與其逢聖公之徒、孰若跖與江也。

呼保義宋江 不假稱王 而呼保義 豈若狂卓 專犯諱忌

智多星吳學究 古人用智 義國安民 惜哉所予 酒色鴆人

玉麒麟盧俊義 白玉麒麟 見之可愛 風塵大行 皮毛終壞

大刀關勝 大刀關勝 豈雲長孫 雲長義勇 汝其後昆

活閻羅阮小七 地下閻羅 追魂攝魄 今其活矣 名喝太伯

尺八腿劉唐 將軍下短 貴稱侯王 汝豈非夫 腿尺八長



沒羽箭張清 箭以羽行 破敵無頗 七札難穿 如游斜何  
浪子燕青 平康巷陌 豈知汝名 太行春色 有一丈青  
病尉遲孫立 尉遲壯士 以病自名 端能去病 國功可成  
浪里白跳張順 雪浪如山 汝能白跳 願隨忠魂 來駕怒潮  
船火兒張橫 太行好漢 三十有六 無此火兒 其數不足  
短命二郎阮小二 灌口少年 短命何益 曷不監之 清源廟食  
花和尚魯智深 有飛飛兒 出家尤好 與爾同袍 佛也被惱  
行者武松 汝優婆塞 五戒在身 酒色財氣 更要殺人  
鐵鞭呼延綽 尉遲彥章 去來一身 長鞭鐵鑊 汝豈其人  
混江龍李俊 乘龍混江 射之即濟 武皇雄爭 自惜神臂  
九文龍史進 龍數肖九 汝有九文 盍從東皇 駕五色雲  
小李廣花榮 中心慕漢 奪馬而歸 汝能慕廣 何憂數奇  
霹靂火秦明 霹靂有火 摧山破嶽 天心無妄 汝孽自作  
黑旋風李逵 風有大小 不辨雌雄 山谷之中 遇爾亦凶  
小旋風柴進 風有大小 黑惡則懼 一噫之微 香滿太虛  
插翅虎雷橫 飛而食肉 有此雄奇 生入玉關 豈傷令姿  
神行太保戴宗 不疾而速 故神無方 汝行何之 敢離太行

急先鋒索超 行軍出師 其鋒必先 汝勿銳進 天兵在前

立地太歲阮小五 東家之西 卽西家東 汝雖特立 何有吾宮

青面獸楊志 聖人治世 四靈在郊 汝獸何名 走曠勞勞

賽關索楊雄 關索之雄 超之亦賢 能持義勇 自命何全

一直撞董平 昔樊將軍 鴻門直撞 斗酒肉肩 其言甚壯

兩頭蛇解珍 左嚙右噬 其毒可畏 逢陰德人 杖之亦斃

美髯公朱全 長髯郁然 美哉豐姿 忍使尺宅 而見赤眉

沒遮攔穆橫 出沒大行 茫無畔岸 雖沒遮攔 難離伙伴

拼命三郎石秀 石秀拼命 志在金寶 大似河魴 腹果一飽

雙尾蝎解寶 醫師用蝎 其體貴全 反其常性 雷公汝嫌

鐵天王晁蓋 毗沙天人 證紫金軀 頑鐵鑄汝 亦出洪爐

金鎗班徐寧 金不可辱 亦忌在穢 盍鑄長戈 羽林是衛

撲天雕李應 鷲禽雄長 惟鷲最狡 毋撲天飛 封狐在草

此皆羣盜之靡耳、聖與既各爲之贊、又從而序論之。何哉。太史公序游俠而進姦雄、不免異世之譏、然其首著勝廣於列傳、且爲項籍作本紀、其意亦深矣、識者當自能辨之云。華不注山人戲書。」

龔聖與の序文中「雖有高如李高輩傳寫」の「高如李高」には鉛印本「大略」以來すべての版にそれが人名であることを示す傍線を付けており、「小説舊聞鈔」も同様で、「小説的歴史的變遷」でも「宋元間有高如、李高等」と「高如」

で句讀を切っているから、魯迅がこれを二人の人名と取ったことは疑いを容れない。この部分の解釋については「史略」に先立つ胡適の「水滸傳考證」がすでに傍線をつけて二人の人名と解しており、後の鄭振鐸の「水滸傳的演化」でも「高如、李嵩輩所傳寫的『水滸傳奇』」と書いているから、當時の一般的な讀み方であったか、或いは吟味なく胡適の解を襲ったのかもしれない。しかし李嵩が南宋の畫院待詔にまでなつた宮廷畫家であるのに對して、高如の方はまったく無名の人物である。そこで全集注（又趙景深說、後出）が一説として示したように「全句意謂一時高手如李嵩輩」、つまり「高きこと李嵩の如き輩の傳寫」と讀むべきで、二人の人名と解するのはやはり胡適等の誤讀であらう。なお清の陳宏緒の「寒夜錄」も「癸辛雜識」のこの文を引くがそこは「高人如李嵩輩」に作っている。李嵩が畫家である以上従つてまた「傳寫之書」も魯迅たちが考えたような物語を記録したものではなく、「水滸」の物語に登場する三十六人の人物像であつたはずで、後の陳洪綬の「水滸葉子」や「水滸畫譜」の先蹤であつたと考えられる。趙景深「中國小說史略疏證」一四云、「雖有高如李嵩輩傳寫」、明陳宏緒「寒夜錄」引舊本「癸辛雜識」作「雖有高人如李嵩輩傳寫」。李嵩は南宋名畫家。「杭州府志」與「圖繪寶鑿」載「李嵩、錢唐人、從訓養之、爲光、寧、理三朝官畫院待詔、工畫人物道釋、得從訓遺意」。「傳寫」的意志は「傳神寫照」、在這裏是指畫而不是指小說。說見楊憲益「零墨新箋」頁九二—九三。「曲海總目提要」卷十四「水滸記」的說明也說「宋時畫手李嵩輩、傳寫其像、士大夫頗不見黜、龔聖與至爲作三十六贊。」

「宣和遺事」魯迅が據つたと思われるのは黃氏士禮居叢書本で、それには他本にはない目錄が附いている。しかしその目錄は「史略」の節目ほど詳しくはない。ここは魯迅が原文から洗い出したものである。士禮居叢書本の目錄を左に舉げておく。

楊志等押花石網違限配衛州 孫立等奪楊志往太行山落草 宋江因殺閻婆惜往尋晁蓋 宋江得天書三十六名將名 宋

江三十六將共友 張叔夜招宋江三十六將降

3 惟「宣和遺事」所載、以至或曰施作羅續（金人瑞說）

一四〇十三

寫印本「大略」十二云、元人劇曲、亦多取梁山濼故事爲資材、而性情節目、間與今本水滸傳殊異。意者此種故事、載在人口者甚多、雖已有書本、而失之簡略、於是又復有人、起而薈萃取捨之、綴爲巨帙、使較有條貫、可觀覽、是爲今存之水滸傳。其綴集者、或曰羅貫中（王圻郎瑛說）、或曰施耐菴（胡應麟說）、或曰施耐菴作羅貫中續（金人瑞說）。

鉛印本「大略」以降は現行と異同はない。唯陳泰の籍貫を三八年版全集までは「茶陵人」とするが五七年版全集で「茶陵人」と改められた。字音は違はずであるが、前漢の置く所で後漢ではすでに「茶陵」に改められたという。今の湖南茶陵である。

「宣和遺事」の版本については第十三篇5を参照。「遺事」の三十六人の表で「李進義」に作るのは黃氏刻本そして士禮居叢書本で、王氏洛川本では「盧進義」に作る。但し王氏本も宣和四年の十二人の表では「李進義」に作る。また贊からの列舉で「史略」は鉛印本「大略」以降すべて「盧進義」に作っているが、これは魯迅の筆誤で、「癸辛雜識」各本も「小説舊聞鈔」も皆「盧俊義」に作るのに據って訂すべきである。

胡適「水滸傳考證」三云、周密（宋末人、元武帝時還在）的「癸辛雜識」載有龔聖與の三十六人贊。三十六人の姓名大致與「宣和遺事」相同、只有吳加亮改作吳用、李進義改作盧俊義、阮進改爲阮小二、李海改爲李俊、王雄改爲楊雄。這都與「水滸傳」更接近了。此外周密記的、少了公孫勝、林冲、張峯、杜千四人、換上宋江、解珍、解寶、張橫四人、「宣和遺事」有張橫、但不在天書三十六人之數。也更與水滸接近了。

又三云、元朝「水滸」故事非常發達、這是萬無可疑的事。元曲裡的許多「水滸」戲便是鐵證。(中略)元朝戲曲裡演述「梁山泊」好漢的故事的、也有多少種。依我們所知、至少有下列各種。

1 高文秀的●「黑旋風雙猷功」(「錄鬼簿」作「雙猷頭」)

2 又 「黑旋風喬儒學」

3 又 「黑旋風借屍還魂」

4 又 「黑旋風鬪鷄會」

5 又 「黑旋風詩酒麗春園」

6 又 「黑旋風窮風月」

7 又 「黑旋風大鬧牡丹園」

8 又 「黑旋風敷演劉耍和」(4至5種 涵虛子皆無黑旋風三字 今據暖紅室新刊的鐘嗣成「錄鬼簿」爲

準。)

9 楊顯之的 「黑旋風喬斷案」

10 康進之的●「梁山泊黑旋風負荆」

11 又 「黃旋風老收心」

12 紅字李二的 「板踏兒黑旋風」(涵虛子無下三字。)

13 又 「折擔兒武松打虎」

14 又 「病楊雄」

15 李文蔚的 ● 「同樂院燕青博魚」（錄鬼簿）上三字作「報冤臺」、博字作「撲」、今據「元曲選」。

16 又 「燕青射雁」

17 李致遠的 ● 「都孔目風雨還牢」

18 無名氏的 ● 「爭報恩三虎下山」

19 又 「張順水裡報怨」

以上關於梁山泊好漢的戲目十九種、是參考「元曲選」「涵虛子」（「元曲選」卷首附錄的）和「錄鬼簿」（原書有序、年代爲至順元年、當西曆一三三〇年。又有題詞、年代爲至正庚子、當西曆一三六〇年。）三部書輯成的。不幸這十九種中、只有那加 ● 的五種現在還保存在臧晉叔的「元曲選」裡（下文詳說）其餘十四種現在都不傳了。

陳泰「所安遺集」補遺云、江南曲序 余童卯時、聞長老言宋江事、未究其詳。至治癸亥秋九月十六日、過梁山、泊舟遙見一峰、嵒嶮有跨。問之篙師、曰、此安山也。昔宋江事處\*絕湖爲池、闊九十里、皆蘆荷菱芡、相傳以爲宋妻所植。宋之爲人、勇悍狂俠。其黨如宋者三十六人。至今山下分贓台、置石座三十六所。俗所謂「來時三十六、歸時十八雙」、意者其自誓之辭也。始予過此、荷花彌望、今無復存者、惟殘香相送耳。因記王荆公詩云、「三十六陂春水、白首想見江南。」味其詞作「江南曲」原注、曲因畫損無存。以叙游歷、且以慰宋妻植荷之意云。\*編者注云、按此句有脫誤。朱一玄編「明清

小說資料選編」上册（一九八九年齊魯書社）

「王圻說」 「續文獻通考」一七七、見第十四篇3已引。

「田汝成說」 「西湖游覽志餘」二五、見第十四篇3已引。

郎瑛「七修類稿」三三三云、「三國」「宋江」二書、乃杭人羅本貫中所編。予意舊必有本、故曰編。「宋江」又曰錢塘施

耐庵的本。昨於舊書肆中得抄本「錄鬼簿」、乃元大梁鍾繼先作、載宋元傳記之名、而於二書之事尤多。據此、見原亦有跡、因而增益編成之耳。

又三五云、史稱宋江三十六人橫行齊魏、官軍莫抗、而侯蒙舉討方臘。周公謹載其名贊於「癸辛雜志」。羅貫中演爲小說、有替天行道之言、今揚子濟寧之地、皆爲立廟。據是、逆料當時非禮之禮、非義之義、江必有之、自亦異於他賊也。但貫中欲成其事、以三十六爲天罡、添地煞七十二人之名、又易尺八腿爲赤髮鬼、一直棒爲雙鎗將、以至淫辭詭行、飾詐眩巧、聳動人之耳目、是雖足以溺人、而傳久失其實也多矣。(下略)均「小說舊聞鈔」引。

「胡應麟說」「少室山房筆叢」四一、見第十四篇3已引。

李贄「忠義水滸傳」叙云、太史公曰、「說難」「狐憤」、賢聖發憤之所作也。」由此觀之、古之聖賢、不憤則不作矣。不憤而作、譬如不寒而顫、不病而呻吟也。雖作何觀乎。「水滸傳」者、發憤之所作也。蓋自宋室不競、冠履倒施、大賢處下、不肖處上。馴致夷狄處上、中原處下。一時君相、猶然處堂燕鶻、納幣稱臣、甘心屈膝于犬羊已矣。施·羅二公、身在元、心在宋。雖生元日、實憤宋事。是故憤二帝之北狩、則稱大破遼以泄其憤。憤南渡之苟安、則稱滅方臘以泄其憤。敢問泄憤者誰乎。則前日嘯聚水滸之強人也。欲不謂之忠義不可也。是故施·羅二公傳「水滸」、而復以忠義名其傳焉。(下略、谷與堂本序)

「金人瑞說」「第五才子書水滸傳三序」、同書「宋史目」見本篇10所引。

4 原本「水滸傳」今不可得、以至其他不可考

四二一

寫印本「大略」にはこの部分に相當する記述なく、鉛印本「大略」以降は現行と異同はない。

周亮工「書影」二云、故老傳聞、羅氏爲「水滸傳」一百回、各以妖異語引其首。嘉靖時、郭武定重刻其書、削其致語、

獨存本傳。金壇王氏「小品」亦云、此書每回前各有楔子、今俱不傳。予見建陽書坊中所刻諸書、節縮紙板、求其易售、諸書多被刊落。此書亦建陽書坊翻刻時刊落者。六十年前、白下吳門虎林三地書未盛行、世所傳者、獨建陽本耳。

「水滸傳全書發凡」云、一、古本有羅氏「致語」、相傳「燈花婆婆」等事、既不可復見。及後人有因四大寇之拘而酌損之者、有嫌一百廿回之繁而淘汰之者、皆失。郭武定本即舊本移置閩婆事、甚善。其于寇中去王田而加遼國、猶是小家照應之法。不知大手筆者正不爾爾、如本內王進開章而不復收繳、此所以異于諸小說、而爲小說之聖也歟。袁無涯刻本。

錢曾「也是園書目」十云、宋人詞話燈花婆婆（後略。今據「虞山錢蓮王藏書目錄彙編」）

5 現在之「水滸傳」、以至（第九回 豹子頭刺陸謙富安）

一四一六

寫印本「大略」十二云、今存之水滸傳有三本。一、忠義水滸傳、一百十五回、題東原羅貫中編輯。其書始于洪太尉誤走妖魔、而次以百八人之漸聚山泊、已而受招安、破遼平田虎王慶方臘、與宣和遺事所載者略同。後來則智深坐化于六和、宋江服毒而自盡、累顯靈應、終爲神明。惟文辭蕪拙、體例紛紜、中間詩歌、亦俱鄙倍、定爲元明間書、正合度量。今名之曰原本。王圻郎瑛云羅貫中作者殆據此本也。

鉛印本「大略」以降現行本まで次のものを除いて異同はない。「終爲神明。」の句點が合訂二版以後讀點となるが、訂正版で元に戻る。「鄙俗」の「俗」字、寫印本・鉛印本「大略」では「倍」に作るが、三版で「俗」に正す。「草創」の「草」字、もと「艸」字、七三年版全集で始めて「草」字となる。引文では「五里路外有市井」は、合訂二版以降皆括弧で括られるが、これは鉛印本「大略」、初版のように二重カギ括弧が引用符號。“に戻すべきである。他に五七年版全集以後、「喫」を「吃」に、「鎗」を「槍」に、「逕」を「徑」に作る。

引用百十五回本「忠義水滸傳」如何なるテキストか不明だが、「英雄譜」本の中でも後刻だとされる「漢宋奇書」



本と最も合うようである。例えば巻首に「金陵興賢堂刊行」と稱する京大文學部藏本との對校の結果は「却纔老軍說」の「却」字を「恰」に作る他は完全に一致する。一九二二年二月十四日の「日記」に「夜、錢玄同『漢宋奇書』一部二十本を寄り來る」とある。それがどんなテキストかは不明だが、この引用の底本になった可能性は十分ある。なお今では「漢宋奇書」本には十種の版本があることが分っている。又「史略」で「未見」とされた單行本はその後の調査で幾つか發見され、「孫目」や「水滸書錄」に著録された。なかでも最近では東大東洋文化研究所雙紅堂文庫の「忠義水滸志傳」二十五卷一百十五回明崇禎劉興我刊本が「古本小説叢刊」（中華書局）に影印され見易くなった。「史略」引文とは合わせ部分が幾つかある。

【魯迅藏書目錄】 子部小説家類云、【水滸傳】 七十回 楔子一回 元施耐庵著 清金聖歎評 日本明治二十八年（一八九五）東京林平次郎銅版本 文魁堂藏板 十二册  
又平裝本之部、文學、小説云、【水滸】 施耐庵著 一九二〇年 亞東圖書館 二册

【百回本水滸】 施耐庵著 一九二五年 初版 五册 李玄伯據明嘉靖本重印 第一册 第三册爲一九二五年再版  
この他「水滸傳」に關して魯迅の記録にあるものは次の通りである。

【日記】 一九二二年二月十六日云、上午、其中堂寄來「水滸畫譜」二册、【忠義水滸傳】前十回五册、書目一册。この書については「書帳」にも「柳川重信水滸傳畫譜二册 二・三〇 二月十六日 忠義水滸傳前十回五册 一・〇〇」とあり京都其中堂から取り寄せたものだが、「藏書目錄」に著録しない。【忠義水滸傳】前十回は享保十三年岡島冠山訓點本で、正しく胡適が青木正兒博士から贈られたものと同版である。

又一九二三年十一月十四日云、丸山來并交藤塚教授所贈【通俗忠義水滸傳】并【拾遺】一部八十本、「標注訓譯水滸

傳」一部十五本。藤塚鄰が贈つたもので前者は寶曆七—寛政二刊の岡島冠山の名を冠した漢字片假名讀み下し文の書、後者は平岡龍城譯大正三—五年近世漢文學會刊の七十回排印本である。共に直接には「史略」成稿には關わらないと思われる。これらも「書帳」に記載があるにもかかわらず「藏書目錄」は著録しない。

又一九二四年二月十六日云、晚寄胡適之信并百廿回本「水滸傳」一部。一百二十回本は胡適宛書信二四〇二〇九（見本篇？）に言うものである。

胡適「水滸傳後考」云、（3）百十五回本「忠義水滸傳」。此本與「三國演義」合刻、每頁分上下兩截、上截爲「水滸」、下截爲「三國」、合稱「英雄譜」。坊間今改稱「漢宋奇書」。我買得兩種、一種首頁有「省城福文堂藏板」字樣、我疑心這是福建刻本。此書原本是大字本、有鈴木豹軒先生的藏本加參考。但我買到的兩種都是翻刻的小本、裡面的「三國志」已改用毛宗崗評本了。但卷首有熊飛的序、自述合刻「英雄譜」的理由、中有「東望而三經略之魂尚震、西望而兩開府之魂未招。飛鳥尚自知時、嫠婦猶勤國恤」的話、可見初刻時大概在明崇禎末年。

又云、此外還有兩種板本、我自己雖不會見著、幸蒙青木正兒先生替我抄得回目與序例的。（5）百十回本的「忠義水滸傳」（日本京都帝國大學鈴木豹軒先生藏）。這也是一種「英雄譜」本、內容與百十五回本略同、合刻的「三國志」還是「李卓吾評本」。鈴木先生藏的這一本上有原藏此書的中國商人的跋、有康熙十二年至十八年的年月、可見此書刻於明末或清初、大概即是百十五回本的底本。

又云、（4）百二十四回本「水滸傳」。首頁刻「光緒己卯新鐫、大道堂藏版」。有乾隆丙午年古杭枚簡侯的序。後附雁宕山樵的「水滸後傳」、首頁有「姑蘇原板」的篆文圖章。大概這書是在江蘇刻的。後傳板本頗佳、但那百二十四回的「前傳」板本很壞。

寫印本「大略」十二云、二、忠義水滸傳一百二十回、題施耐庵集撰羅貫中纂修。中國已罕見、今所見者、惟日本翻刻本十回、亦始于誤走妖魔、而繼以魯達林冲事迹、與原本同。餘雖未見、然第五回結末于魯達有「直教名馳塞北三千里、證果江南第一州」之語、即指六和坐化、則其餘當亦與原本同也。惟于文辭、則增刪潤色、幾乎改觀、盡削惡詩、頗增駢語、描寫亦愈入細微、周亮工書影所謂「故老傳聞羅氏水滸傳一百回、各以妖異語冠其首、嘉靖時、郭武定重刻其書、削其致語、獨存本傳」者蓋即此、今名之曰郭本。此本始以爲施撰羅修。胡應麟莊嶽委談云、「元人武林施某所編水滸傳特爲盛行、世率以其鑿空無據、要不盡原也、余偶閱一小說序、稱施某嘗入市肆、袖閱故書、於敝楮中得宋張叔夜禽賊招語一通、備悉其一百八人所由起、因潤色成此編。」則獨舉施名、其所見爲別本、抑即此本、今不可考矣。

寫印本は冒頭に「百二十回」とするが、これは魯迅の思いちがいで、「百回」としなくてはならない。内容は郭武定本について以外は鉛印本以降の百回本の記述とも一致するし、胡適「水滸傳後考」の百回本の項とも符合する。

各版の異同については、魯達の語の讀點は寫印本にはあるが、鉛印本以降なく、五七年版全集で加えられた。また魯達の語の「第五回」は「第四回」に訂すべきである。「草帚兒」五七年版までは「箒」、「手拈梅花」同じく五七年版までは「撚」、「槍」「徑」についてはら引に同じ。「雪中行沽」の「行」字、合訂二版のみ脱す。「即指六和坐化」「乃大有增刪」は三八年全集のみ「與」「全於」に誤る。

高儒「百川書志」六史部野史云、「忠義水滸傳」一百卷。錢塘施耐庵的本、羅貫中編次。宋寇宋江三十六人之事、并從副而有八人、當世尚之。周草窗癸辛雜志中具百八人混名。「小説舊聞鈔」引

沈德符「萬曆野獲編」五云、武定侯郭勲、在世宗朝號好文、多藝能計數。今新安所刻「水滸傳」善本、即其家所傳、

前有汪太函序、託名天都外臣者。『小說叢書』引

胡適『水滸傳後考』云、去年七月裡我做了一篇『水滸傳考證』提出了幾個假定的統論。(省略(1)至(4))(5)到了明嘉靖朝、武定侯郭勛刻出一部定本『水滸傳』來。這部書是有一百回的。前七十回全採『七十回本』、後三十回是刪改『原百回本』後半的四五十回而成的。『原百回本』的後半有征田虎征王慶兩大部分、郭本把這兩部分都刪去了。這個本子、我們叫他做『新百回本』、或叫做『郭本』。(頁四五—五二)(6)明朝最通行的『水滸傳』、大概都是這個『新百回本』。後來李贄評點的『忠義水滸傳』也是這個『郭本』。直到明末、金聖歎說他家貫華堂藏有七十回的古本『水滸傳』、他用這個七十回本來校改『新百回本』、定前七十回爲施耐菴做的、七十回以下爲羅貫中續的。有些人不信金聖歎有七十回的古本、但我覺得他沒有做託古本的必要、故我假定他有一種七十回本作底本。他雖有小刪改的地方、但這個七十回本的大體必與那新百回本『忠義水滸傳』的前七十回差不遠、因爲我假設那新百回本的前七十回是全採那明朝中葉的七十回本的。(頁三五—五二)(中略)我去年做『考證』時、只會見着幾種七十回本的『水滸』、其餘的版本我都不會見着。現在我收到的『水滸』版本有下列的各種。

(1)李卓吾批點『忠義水滸傳』百回本的第一回至第十回。此書爲岡島璞加訓點之本、刻於享保十三年(西曆一七二八)、是用明刻本精刻的。此書僅刻成二十回、第十一回至第二十回、刻於寶曆九年、但更不易得。這十回是我的朋友青木正兒先生送我的。

(2)百回本『忠義水滸傳』的日本譯本。岡島璞譯、日本明治四十年東京共同出版株式會社印行、大正二年再版。明刻百回本『忠義水滸傳』現已不可得、日本內閣文庫藏有一部、此外我竟不知道第二本了。岡島譯本可以使我們考見『忠義水滸傳』的內容、故可寶貴。

引用百回本「水滸傳」「小説舊聞鈔」の「水滸傳」の項で、王圻「續文獻通考」を引く案語に「嘗見明刻百回本「忠義水滸傳」、已題「施耐菴集撰、羅貫中纂修」、蓋在聖歎前」と言うが、「史略」執筆當時百回本全卷は殆んど見られなかつたから、ここに引く百回本の第十回は、胡適の「後考」に言う李卓吾批點「忠義水滸傳」享保十三年岡島璞加訓點本で、前項5に引く「日記」に見られるように、魯迅は同じ書を京都の古書肆其中堂から購つてゐる。従つてこの底本もその書にちがいないのだが、いささか不審な點がある。引用文を容與堂本と享保和刻本によつて對校したが、「留下些銀子」の「些」字、容與堂本が脱するのに對して享保本は脱しない。ただ「——那雪下得緊」の線がないことや（これは舊時の刊本ではないのが當然で、魯迅が轉錄した時に書き加えたとしか考えられない）「却道是」を「却言道」に作るなど兩本はともに同じで、「史略」引用と一致しないなど疑問は残る。

7 三曰一百二十回本「忠義水滸傳全書」、以至（詳見「書影」一）

一四十二

寫印本の時點でこの書の存在は胡適の「水滸傳後考」に見られるように知られてゐた。しかし書物自體は日本の所藏で當時は見られず、楊定見の序や「發凡」、回目など詳しいことは分らなかつたのだらう。従つてこの書に關する叙述を省いたものと思われる。

鉛印本「大略」以降は一箇所を除き現行本と異同はない。一箇所とは「頗、挫文情者」の「頗」字で、これは鉛印本「大略」から十一版まですべて「頓」字に作り、三八年全集版で「頗」に變えられた。おそらく誤植であらうが、以後はみなそれを襲つてゐる。百二十回本の發凡が「頓」である以上、ここは「頓」に戻すべきである。

胡適「水滸傳後考」云、（6）百二十回本「忠義水滸傳全書」（日本京都府立圖書館藏）。這是一種明刻本、有楊定見序、自稱爲「事卓吾先生」之人、大概這書刻於天啓崇禎年間。這書有「發凡」十一條、說明增加二十回的緣起。這書增加的

二十回雖然是記田虎王慶兩寇、但依回目看來、與上文(3)(4)(5)三種本子很有不同的地方。

胡適「百二十回本忠義水滸傳序」云、(5)百十回本「忠義水滸傳」、也是與三國志合刻的「英雄譜」本。(日本鈴木虎雄先生藏)(6)百二十回本「忠義水滸傳」、明刻本。(日本京都府立圖書館藏、有楊定見序)這兩種我當時雖未見、却蒙日本學者青木正兒先生把他們的回目和序例都鈔錄了寄給我。

我有了這六種版本作根據、遂又作了一篇「水滸傳後考」。(「胡適文存」初排本卷三、頁一四七一—一八四)這是民國十年六月的事。民國十二年左右、我知道有三四部百二十回本「忠義水滸傳全書」出現、涵芬樓得了一部、我自己得了一部、還有別人收着這本子的。後來北京孔德學校收着一部精刻本、圖畫精緻可愛。

致胡適的信二四〇二〇九全集一云、適之先生、前回買到百廿回本「水滸傳」的齊君告訴我、他的本家又有一部這樣的「水滸傳」、板比他的清楚(他的一部已頗清楚)、但稍破舊、須重裝、而其人知道價值、要賣五十元、問我要否。我現在不想要。不知您可要麼？

聽說李玄伯先生買到若干本百回的「水滸傳」、但不全。先生認識他麼？我不認識他、不能借看。看現在的情形、百廿回本一年中便知道三部、而百回本少聽到、似乎更難得。

樹人 二月九日

魯迅と胡適の間には小説史に關して種々の情報の交換があつたことが、この手紙だけではなく、二二〇八一四、二二〇八二一、二四〇一〇五等からも窺える。また餘談だが、日記によれば、この手紙の後二月十一日には「晚、胡適之が信を得」とあり、さらに十六日には「晚、胡適之に信並びに百廿回本「水滸傳」一部を寄る」とある所からすれば、魯迅は教育部での同僚で親友でもあつた齊君即ち齊壽山の本家が所藏していた百二十回本「水滸傳」(おそらく「水滸傳全書」)を胡適が見たいと返事を寄こしたので、仲介の勞を取つて代送したのだらうと思われる。後に胡適が

「百二十回本水滸傳序」で述べる「我自己得了一部」とはこの書であつたかもしれない。そして「還有別人收着這本子的」とは齊壽山をいうのだろう。なお魯迅の此處の記述は齊壽山所藏本に據る可能性が高い。

楊定見「忠義水滸全書小引」云、吾之事李卓吾先生也、貌之承而心之委、無非卓吾先生者。非先生之言弗言、非先生之閱弗閱。或日狂、或日癖、吾忘吾也、知有卓吾先生而已矣。先生歿而名益尊、道益廣、書益播傳。卽片牘單詞、留向人間者、靡不珍爲瑤草、儼然欲傾宇內。猗歎盛哉、不朽可卜已。然而奇其文者十七、奇其人者十三。叩爾胸中、則皆未有卓吾先生者也。自吾游吳、訪陳無異使君、而得袁無涯氏。揖未竟、輒首問先生。私淑之誠、溢于眉宇、其胸中殆如有卓吾者。嗣是數過從語、語輒及卓老。求卓老遺言甚力、求卓老所批閱之遺書又甚力。無涯氏豈狂耶癖耶。吾探吾行笥、而卓吾先生所批定「忠義水滸傳」及「楊升庵集」二書與俱、挈以附之。無涯欣然如獲至寶、願公諸世。吾問二書孰先。無涯曰「水滸」而忠義也、忠義而「水滸」也、知我罪我、卓老文春秋近是。其先「水滸」哉。其先「水滸」哉。吾笑曰、唯、唯。非卓老不能發「水滸」之精神、非無涯不能發卓老之精神。吾之事卓吾先生最久、而無涯之得卓而笑、煮茶共啜。取卓吾先生「叙忠義水滸傳」一文、同聲讀之。胥江怒濤、若或應答。吾忘無涯矣、無涯忘吾矣、知有卓吾先生而已矣。

楚人鳳里楊定見書于胥江舟次。

「字句更定」百二十回本では第十回に見える。

周亮工「因樹屋書影」二云、葉文通、名晝、無錫人。多讀書、有才情。留心二氏學、故爲詭異之行、跡其生平、多似何心隱。或自稱錦翁、或自稱葉五葉、或稱葉不夜、最後名梁無知、謂梁谿無人知之也。當溫陵「焚、藏書」盛行時、坊間種種借溫陵之名以行者、如「四書第一評」、「第二評」、「水滸傳」、「琵琶」、「拜月」諸評、皆出文通手。文通自有

「中庸頌」、「法海雪」、「悅客編」諸集。今所傳者、獨「悅客編」耳。文通甲子乙丑間遊吾梁、與雍丘侯五汝猷倡爲海金社、合八郡知名之士人、鑄一集以行。中州文社之盛、自海金社始。後誤納一麗質、爲其夫毆死。文通氣息僅屬、猶鳴冤邑令前、惜乎無有白其事者。侯汝猷言、其遺骸至今旅泊雍丘郭外。一九六二年中華書局排印十卷本

8 發凡又云、以至未能定也

一四四—一〇

鉛印本「大略」より第十一版に至るまで「嫌二百二十回之繁」、「似百二十回」の「二十」は「水滸全書」の「發凡」に従つて「廿」に作るが、三八年版全集で「二十」と改め現行本に至る。その他に異同はない。なお本文に「田虎王慶在百回本與百十七回本名同而文迥別」とあるが、田虎王慶は百回本では省かれており、又「百十七回本」の「水滸傳」は存在しないから、ここは「百二十回本與百十五回本」と訂正しなければならない。どうしてこのような誤りが出たのか不明だが、鉛印本「大略」からすでにそうなっている。

「忠義水滸全書」發凡には本篇4に引用した一條の他に、もう一條こと關聯するものがあるので左に引く。

一、訂文音字、舊本亦具有功力、然淆訛舛駁之處尚多。如首引一詞、便有四謬、試以此刻對勘舊本、可知其餘。至如「耐」之爲「奈」、「躁」之爲「燥」、猶云書錯。若混「戴」作「帶」、混「煞」作「殺」、混「櫃」作「拴」、「衝」之無分、「逕」「竟」之莫辨、遂屬義乖。如此者、更難枚舉、今悉校改。其音綴字下、雖便寓目、然大小斷續、通人所嫌、故總次回尾、以便翻查。回遠者例觀、音異者別出。若半字可讀、俗義可通者、或用略焉。袁無涯刻本。

引用された「發凡」についての魯迅の讀法には、後に擧げる胡適の「二百二十回本忠義水滸傳序」が指摘するような問題点もあるが、他にも一二よく分らない所がある。

(二)「發凡」を讀んで「古本百回があったことが分る」と言うが、「發凡」十條全文を見ても何處にも百回本の古本



の存在を示すような文言はなく、「有嫌一百二十回之繁而陶汰之者」という表現からすれば、むしろ一百二十回本の古本があったと考える方が理に合う。ここは本篇4に引く周亮工の「羅氏爲水滸傳百回」という記述や高儒の「百川書志」の著録から、古本は百回とする思い込みからの誤りだろうか。しかし魯迅の理解からすれば原本は百十五回本で百回本はそれを削ったものなのだ。不可解と言う他ない。待考。

(二)「郭武定本即舊本移置閻婆事、甚善」、「閻婆移置之事」とは、當時の魯迅の説から言えば百十五回文簡本の第二十一回から百回ないし百二十回文繁本の第二十回に移しかえた事である。ところで魯迅はこの文を「舊本に即して」と読んでいるようである。後文の「在郭本所據舊本之前、當又有別本」という記述からもそのことは窺える。つまり「舊本」とは「古本」でない、たとえば「因四大寇之拘而酌損之者」や「嫌一百二十回之繁而陶汰之者」などもそこに入る一般名詞に近いものとして解しているようである。「發凡」に於ける「舊本」ということばもかなり曖昧ではあるが、「舊本去詩詞之煩蕪」という記述や「訂文音字、舊本亦具有功力」という表現からすれば特定の「舊本」の如である。「首引一詞、便有四謬、試以此刻對勘舊本、可知其餘」とあるから「全書」によつて容與堂本を校勘すれば、四處もないけれども確かに「剪」を「翦」に、「名」を「形」に作るなど二箇所に訛舛が見られる。そうだとすると「郭武定本即舊本」の「即」は「即して」ではなく「即ち」ということになって、ここでいう「舊本」とは「郭武定本」に他ならない。少くとも「發凡」はそう考えていたようである。そして更に「發凡」の著者も魯迅と同じく「閻婆」の事を百十五回本の第二十一回から百回本の第二十回に移動させたと考えていたことになる。ともかくこの箇處うまく筋道をつけて讀めないのが疑問として提示しておく。

胡適「百二十回本忠義水滸傳序」四云、此本〔新鐫李氏藏本忠義水滸全書〕有「發凡」十條、其中頗多可供考證的

材料，故我在「水滸傳後考」裡，魯迅先生在「中國小說史略」裡，往往徵引「發凡」的話。但十年以來，新材料稍稍出現，可以證明「發凡」中的話有很不可信之處，如第六條說、

古本有羅氏致語、相傳「燈花婆婆」等事，既不可復見，乃後人有因四大寇之拘而酌損之者，有嫌一百廿回之繁而淘汰之者，皆失。

這些話，十年來我們都信以為真，故我同魯迅先生都信古本「水滸傳」有羅氏致語、有相傳「燈花婆婆」等事，魯迅又相信古本真有百二十回本。我現在看來，這些話都沒有多大根據，楊定見並不會見「古本」，他說「古本」怎樣怎樣，大概都是信口開河，假託一個古本，作為他的百二十回改造本的根據而已。

羅氏致語之說，除此本「發凡」之外，還有周亮工「書影」說的。

故老傳聞，羅氏「水滸傳」一百回，各以妖異語冠其首。嘉靖時，郭武定重刻其書，削其致語，獨有本傳。

又「王氏小品」也說、

此書每回前各有楔子，今俱不傳。

這都是以訛傳訛的話。每回前各有妖異的致語，這是不可能的事。「水滸傳」的前面有「洪太尉走妖魔」的一段，這便是「水滸傳」的「致語」。全書只有這一段「妖異語」的致語，別沒有什麼「燈花婆婆」等事。「燈花婆婆」的故事乃是「平妖傳」的致語，其書現存，可以參證。這是因為「水滸傳」和「平妖傳」相傳都是羅貫中做的，兩書各有一段妖異的致語，後來有人記錯了，遂說「燈花婆婆」的故事是古本「水滸傳」致語。後來的人更大其詞，遂說一百回各以妖異的致語了。（參看胡適「宋人話本八種序」頁一—四，又頁二七—三十。）

「宣和遺事」「三路之寇」見第十三篇6所引「宣和遺事」文（全集）一一三頁）。

（待續）